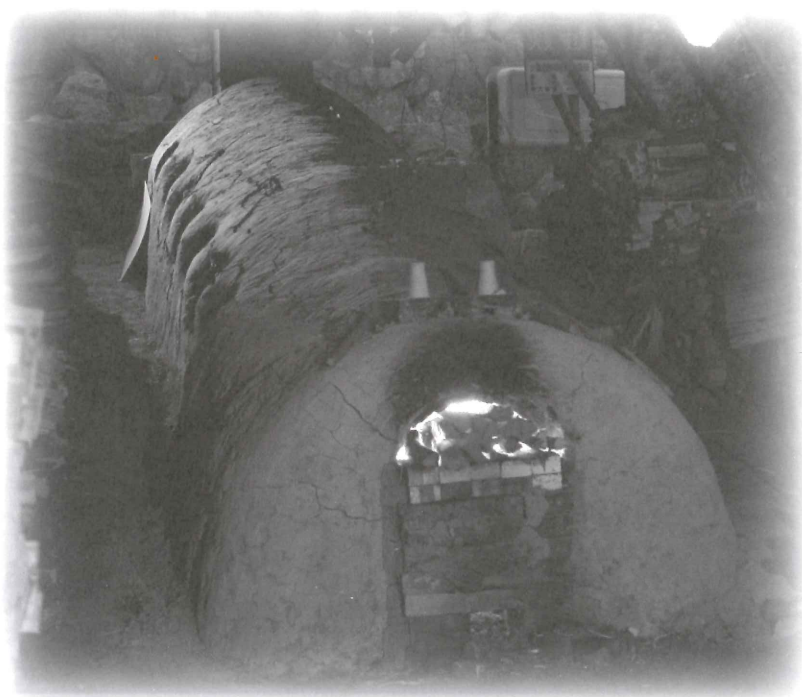


土を焼くということ —タイル原料としての土—

後藤 泰男 〈ものづくり工房 スタッフ〉



いかに魅力的なやきものをつくるか？
入社以来、タイルの研究開発にまい進してきた、ものづくり工房スタッフ後藤泰男が、あらためて土を焼くことの意味について語ります。

瓦の葺き土を再利用できないか？

土・どろんこ館の計画が始まった頃、館を設計していただいている建築家の日置拓人（ひきたくと）さんに、「京都の東本願寺 御影堂の修復で廃棄物として発生する瓦の葺き土（ふきつち※注1）を、土・どろんこ館建設の中で再利用できないか？」とお願いしたことがあります。現在東本願寺では、明治二八年（一八九五）、百年前に再建した御影堂の瓦をすべて地上に降ろし、そのまま使えない瓦を、新しいものに置き換える工事を行っています。（図1）瓦の下に葺かれていた葺き土の量は千百トンにもおよび、

再利用予定の三百トン以外は、廃棄物となってしまいます。この廃棄物（瓦と葺き土）を再利用するお手伝いをINAXがしていました。このプロジェクトでは、屋根からおろした瓦と葺き土を、INAX独自の技術で調湿素材としてリサイクルし、東本願寺の床下に敷くというもので、埋め立て廃棄される予定だった多くの瓦と葺き土の再利用することができます。

タイルの原料として土の成分や特性を理解しているつもりの方は、東本願寺の葺き土も成分的には左官用の土として利用することが可能と考えていましたし、これを土・どろんこ館で再利用すれば話題になるという目論見も持っていました。こういった経緯もあり、葺き土の利用を提案したのです。

この提案を受けて、日置さんが土・どろんこ館の特殊左官を担当した親方 久住有生（くすみなおき）さん（図2）にこの葺き土を触ってもらいまし

た。ところが、久住さんの答は、「この土は簡単には使えません。このままではバサバサしてとても固まり難いのです。」とのことでした。本来の居場所である地面から屋根の上にあげられ、百年も瓦の下で過ごした土は、「左官用の土としては使にくい。この土を使うためには、もう一度地面に戻して水と他の土と混ぜて、しばらく放置する時間が必要だ。」そう左官職人である久住氏は言われました。「土・どろんこ館」の完成目標は決まっております。使用を依頼したときは再利用にはスケジューリングにもう間に合いませんでした。しかたなく使用を断念しました。

土を焼くこととは

その後、久住さんとこの件についてお話しする機会がありました。久住さんは、「土は水を与えることで泥にな

り、乾燥し固化する過程でも水と反応している。あたかも土は生きているのである。」と語られました。生の土を扱う左官職人にとって「土を焼く」ということは、「水との反応を断ち切ってしまうこと。火に焼かれて、再び水を加えても自由に変形することのできなくなってしまう土は、死んでも同然だ。」というのでした。

INAXに入社して、タイルの原料は土であり、焼くことのように変化し、固まるのかを研究し続けてきた私にとって、「土を焼く」ことは必然でした。ですから、「死んだ土」というこの言葉は驚きでした。たしかに、物理的にも化学的にも、土は焼くと、土ではなくなります。そしてそれは土には戻りません。それは事実です。生の土を、土として使う立場の方からみると、土を焼くことで、土は死んでしまふと捉えるのかもしれない。ですが、その時私は、「土を焼くことで、



図1：東本願寺 御影堂修復工事
瓦をおろした屋根

注1：瓦を止めるために屋根にのせた土。最近では下地材も発達し、釘や鋼線などで止めるため、ほとんど土を屋根にのせることはなくなりました。



図2：「土・どろんこ館」の土壁を
塗る久住氏

土は新たに『やきもの』となり、永遠の命を得るのだと自分は考えています。縄文土器は一万年前の人類の営みをわれわれに語ってくれるわけだし、古代エジプトのピラミッドの地下から発見されたタイルは、現在の自分たちに四千年前の輝きを、今なお提供しているわけです。」と、久住さんに熱く反論していました。

陶芸の世界では、昔から伝わる「一に焼き(窯)、二に土、三に細工(技)」という言葉があります。これは、やきものの表情を最終決定する行為は焼くことであり、同じ土や細工を施したのも、焼き方が違えば、まったく違った表情となってしまうということを表しています。したがって、陶芸家たちは、窯の中のどこに自分の作品を置くのかを重要な問題とし、師匠が最も良い位置においた後、弟子たちが順に置く場所を決めていきます。まさに土を「焼く」ことは、総てを決定づける行

為なのです。そして、「土を焼く」ことによって、千年を超える時を隔ててもなお、輝きを失わないタイルややきものを創りだす行為は、土に永遠の命を与える行為と言っても過言ではないと、私には思われるのです。

四千年以上前のタイルが我々に教えてくれるもの

世界で最も古いやきものは一万六千年前のものが日本の青森地区で見つかったという新聞記事を読んだことがあります。土を焼く行為は、人類が文字を使用する以前の先史時代から行われていたことは間違いないところとされています。また、I N A Xライヴミュージアムの世界のタイル博物館には、近代の世界中のタイルが展示されていますが、展示品で最も古いものは、紀元前二六五〇年に建てられた古代エジプトピラミッドの地下に飾られ

ていたタイル(図3)です。私たちは、

当時のままの輝きを持つこれらのタイルを見ることで、悠久の歴史を感じることができ、それと同時に様々な情報を得ることが出来ます。

トルコブルーの輝きを持ったエジプトのタイルを分析すると、宝石であるトルコ石の成分と似通った成分が検出され、宝石の輝きを再現したやきものを壁に飾ったのではないだろうかと推測できます。また、白地にコバルトブルーで絵画を表現したオランダのデルフトタイル(図4)からは、日本の有田焼の呉須による絵付け技法が取り入れられてきたことがわかり、日本と欧州の文化交流と技術の交流が裏付けられています。さらに、自然主義、ネオゴシック、アーツ・アンド・クラフトなどの当時のさまざまな美術様式のデザインをもつイギリスのビクトリアンタイル(図5)からは、産業革命による

ことのできるのです。

次世代に伝えるもの

このように、様々な情報を与えてくれるタイルですが、もう一つ注目すべき事実があります。それはタイルが、数千年から数百年の間、大切に受け継がれ、残されてきたという事実です。残されてきた理由は何なのだろうか？発掘により掘り出された古代のタイルや土器の場合は、古代の生活を知るための学術的価値という明確な理由がありますが、文字や学問が発達し、それらによって学術的価値を伝えることが可能であった中世から近代のタイルもまた、数多く残されてきました。これは、学術的な価値だけではなく何かを、後世に伝えていくためだったと考えられます。

今、住宅やビルの外壁で使用されている工業製品であるタイルは、他の多

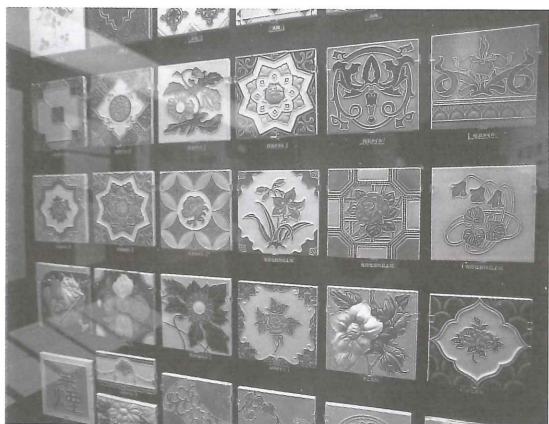


図5：イギリスビクトリアンタイル
(世界のタイル博物館)

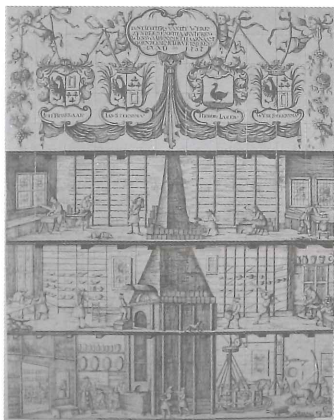


図4：オランダデルフトタイル組絵
(世界のタイル博物館)

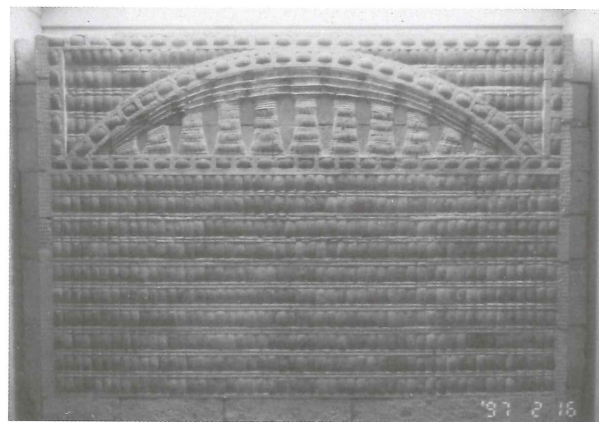
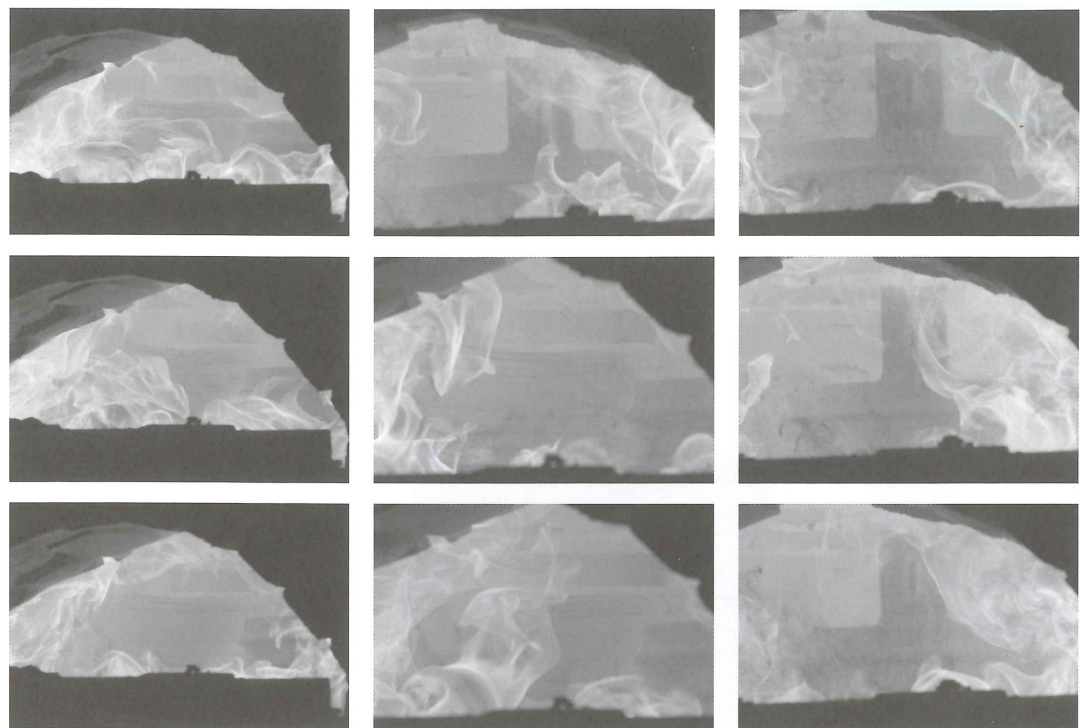


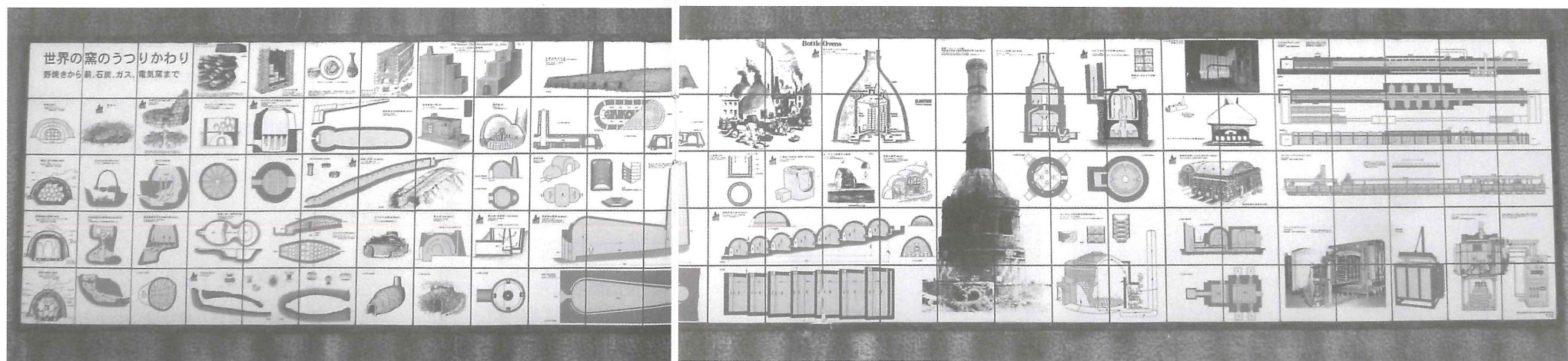
図3：ジェセル王のピラミッド
地下に飾られていたタイル
(カイロ博物館)

くの工業製品と同様に、役目を終える
 とそのほとんどが廃棄されています。
 しかし、タイル博物館には、今日ま
 で大切に保存されてきたタイルが数多
 く展示されています。なぜならそこ
 は、タイルを棄てることをためらった
 人々が存在したからです。きっと、そ
 の人たちはタイルが本当に好きだっ
 たのではないのでしょうか。その人た
 ちがこれらのタイルを残し伝えてきた理
 由の一つは「美しさ」であることは間
 違いないでしょう。ですが、私はそれ
 だけではないような気がするのです。
 今は、まだこの理由がわかりませ
 んが、これからも、土を焼き続けていく
 という行為に関わることを通して、こ
 の答えを見つけていきたいと思ってい
 ます。そして、最終的には、永遠の命
 を持ったタイルだからこそ、そこに残
 すべき価値を持たせ、人々を魅了する
 タイルとして、いままで残ってきたタ
 イルたちと一緒に次の世代へと伝え、

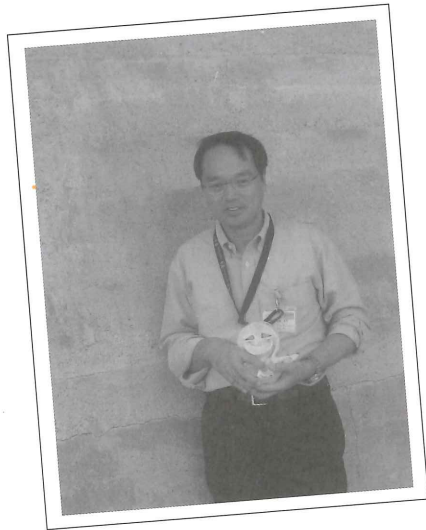
残していきたいと考えます。それが、
 土を土でなくしてしまう「土を焼く」
 という行為に課せられた責務であり、
 このINAXライブミュージアムで新
 たに活動を行っていく「ものづくり工
 房」の責任でもあると感じています。



登り窯の内部



世界の窯のうづりかわり
 (長崎県波佐見町やきもの公園)



* 後藤 泰男 (ごとう やすお)

1959年生まれ。1985年INAX入社。

窯業技術研究所、分析センター、基礎研究所、常滑東工場技術課、タイル建材生産部を経て、ものづくり工房スタッフ。

セラミックス楽器素材開発、古代ピラミッド使用タイルの分析、テラコッタルーバーの開発等に従事。

* 土・どろんこ？はてなノート

百土箱の引き出しでは様々な土の姿をみせていきます。

箱の中に納まりきらない土の姿を紹介するにあたり、土について様々な分野の方にお話を伺い、文章をお寄せいただいています。